石井勗氏談話記録

日時　昭和五十一年二月二十八日

場所　百年史編集室

出席者　伊藤　隆（百年史編集委員会専門委員）
寺崎昌男（当時　同　右）
酒井　豊（当時百年史編集室員）
三谷　博（当時　同　右）
小川千代子（百年史編集室員）

石井勗氏略歴

明治三一（一八九八）・二　名古屋市に椎尾玄順次男として出生・石井菊次郎の養子となる。
大正一一（一九二二）・三　東京帝国大学法学部独法科卒業
大正一三（一九二四）・三　同大学院修了
大正一三（一九二四）・七　旧制姫路高等学校教授
昭和　三（一九二八）・一〇　東京帝国大学学生主事
昭和一二（一九三七）・七　文部省教学局企画課長兼思想課長
昭和一四（一九三九）・三　北支方面軍司令部参謀部勤務
昭和一四（一九三九）・五　興亜院調査官北京勤務
昭和一六（一九四一）・六　九州帝国大学学生課長
昭和一七（一九四二）・四　東京帝国大学書記官、庶務課長
昭和二〇（一九四五）・七　東京帝国大学事務監、事務局長
昭和二四（一九四九）・五　東京大学事務局長
昭和二五（一九五〇）・五　衆議院常任委員会専門員、文部委員会勤務（文教専門員）
昭和四三（一九六八）・三　勲二等瑞宝章授けられる
定年退官後、昭和三七年から弁護士開業中
著書に『東大とともに五十年』（昭和五三年、原書房）がある。

はじめに

――いろいろ古いところからお聞きしたいんですが昭和三年十月、東京帝国大学学生主事におなりになったこと、最初に東大と直接にご関係になったところを伺いたいと思います。

学生監室というのは、学生主事、学生課の前身ですね。先生が学生主事としてご赴任なさったときには、そこはどういうふうな構成でございましたか。

石井　学生監室というものははっきりと現存しておりました。表向きのというか、まあ表向きと言ったほうがいいでしょう。総長は古在由直先生でした。若干弱っておられたけれども、寝ていなければならない病人ではないのに、総長事務取扱として小野塚〔喜平次〕先生がきておったんです。そういう状態で私は迎えられて、こっちへ十月何日付でしたか、末ごろ発令がありました。

来て、初めてわかりましたのは――おわかりいいために端的なことを申し上げますから差し障りがあるかもしれませんが、その当時の話に、古在内閣で思想事件（左翼）を処理しきれなくなったということで、学内の輿望を担って小野塚先生が総長事務取扱になられた。そこでその線で新しくやる。従来の学生監室というものは大体文学部系統の出身者で当時は安藤円秀さん。それで安藤円秀さんの前であったかが今の警視総監〔注・土田国保現防衛大学校校長〕のお父さんの土田誠一さん。これは成蹊高等学校の校長、大体、そういう文学部系統の人々が主であった。

そこに若手として法学士で竹内良三郎さん、この方は私がきてからの学生課長であって、小野塚先生が総長事務取扱で、その助太刀に三羽烏式におられたのが法学部長中田薫、文学部長瀧精一、経済学部長矢作栄蔵の三学部長でした。表向きになると、総長とか小野塚総長とかいわれるけれども、一緒におるときは「やい、小野塚」などと言ってやっておられたグループです。

その頃「学生監室はだめだ」、「古在君ももうだめだ」。これは引退したいし、引退させなければならない。それで「小野塚中心でやる、そして今度は法治主義でやるんだ」という言葉が出ておったんです。若い法学士をおれたちが使ってやるんだ。中田先生は私の恩師ですが、中田先生が「どうも竹内君や石井君に悪いけれどもねえ、ぼくたちが君たちのような若い法学士を使って、東大の混乱状態を解決しようという腹になったんだ、だから、そのつもりでやってくれ」といわれたこともあり、「おれは総長と同じにおまえたちに指図するぞ」という意味であったのです。

姫路高校時代のこと

私がここにくるに至った裏には、姫路高等学校教授の頃から私がマルキシズムの問題に興味を持っておったことがあるんです。担当学科は法制経済と一時的には独乙語。その校長は小松原隆二先生で、もともとは私の八高時代の英語の恩師です。かつての文部大臣であった小松原英太郎さんの親戚で非常な紳士でおとなしい人でした。

私はポンポンと搾取とか労働価値説、階級闘争とか、法制でもやる

し経済でもやるものですから、教室でいろいろな話が出てくる。そうすると場合によってはぼくの講義を時間的に妨害して、進むのを邪魔しようとする。しかしその形跡の認められない限りは十分答弁をする。なお熱心な者で足りなかったら、時間後に学校ででも応答したし、必要の場合は、私の自宅で講義の補足をやるという態度でやっておった。それがおのずから校長の耳に入ったんです。

それで、校長から呼出しがかかり、「石井君ちょっときてくれ。君は質問戦術というのがあるということを知っていますか」。私、「知りません」。「教室で質問する学生はマルキストである。先生が行き詰まるとそこにおる何十人かのクラスメートに『ははあ、やっぱり先生よりもぼくらのマルキシズムのほうがしっかりしている』という印象を与えるという戦術があるということを、文部省の会議で自分は聞いている。石井君、だいじょうぶか」。私、「だいじょうぶです」。校長、「しかし、もし君が取っちめられて詰まっちゃったらどうする」。私、「負けんつもりでおりますけれども、負ければ先方の方が真理ですから、そうなったらそのときから私はアカハタを担いで赤の運動をやります」と。

そんなことで校長もあきれたというような調子でおられる。そのうちに上野公園内の学士院で暑中休暇の一ケ月間文部省の主催で、革命の哲学とか経済、法学、歴史とか、いろいろな面の学者とか検事などの、特別の講習会がありましたので、私はそれに志願して、約一ケ月間聴講したのです。

――何の講習会ですか。マルキシズム対策ですか。

石井　マルキシズムはどういうものであるか、みんなが十分にわからない。自分の道しか知っていないですから、そういう講師が十人か、十五、六人、そうそうたる連中がそろったんです。それへ私も興味を持って出たわけで、相当の勉強になりました。

九月秋の開講になっても、私は夏休み前の講義の態度と少しも変えず依然大胆にやる。そのうちに姫路の警察署から校長のところへ「あなたのところの石井教授が土地の本屋でマルクス全集を取っていますよ」と告げ口に行ったんです。それで校長が「おい、石井君、こう云う話を聞かされたが」と。私、「はい、取っています」。「だいじょうぶか」、「だいじょうぶです」ということで、それっきりになっておった。その頃即ち大正十三年ごろに京都帝大の何とかいう左翼の大検挙があって、それの延長で姫路高等学校の三年生を中心にして約十一、二人ほどが一網打尽に、姫路署へ検挙されました。そのトップが神戸地検姫路支部検事の赤羽という人の一人息子なんです。妙なことになった。だれも知らずにおったら警察から私の隣りの造り酒屋「名城」の店へ電話が掛ってきて私を呼び出してきた。わけがわからないが、出てみたところが、「姫路高等学校の石井先生ですか」というのでそうですというと、「こちらは姫路の警察署長ですが、実はあなたのところの十人ばかりを検挙して押さえておるんです。すみませんけどちょっときていただけませんか」という。私は生徒監でもなく平の教授でおるだけですが、とにかく直ぐに警察へ行きました。何か検挙された連中から「石井がいちばん話が通じる」と見たらしい。それで事情を大略聞いて、大変ですから、校長に早速連絡しました。その翌日、

姫路だけでは済まないというので、神戸にもまだ特高課はできておりませんでしたが、県庁からやってくるということで、校長をはじめ、後に文部省の督学官に栄転せられた近澤〔道元〕教授も同席されました。この人が後日私を東大へ紹介した人なんです。

私は自分の教室へ行って、すぐ講義をするつもりでいたところ、校長のところから使いがきて「授業を休みにしてちょっと校長室へきてくれ」というので行ってみたら、「県から警察の首脳部がくるから立会ってくれ」という話。校長のほかに立会ったのは先の近澤教務課長、新田生徒課長、それから私で、私からいうと大変な目上の先輩ばかりです。それから神戸の県から二、三人やってきていろいろな話になって、受け答えする人間は私一人になってしまったんです。

――生徒主事というのはなかったんですが。

石井 まだそれはなかったのです。その後にできました。それまでは生徒監です。受け答えをするのは私一人になってしまって、校長はじめほかの方は黙って聞いておられる。県はどういう処理をしたか覚えておりませんけれども、とにかく県はそれで満足して帰って行きました。

それから間もなく警察から請け出してきましたが、キャップは赤羽、副キャップは遠藤。遠藤が赤羽についだ大物だと私は言ったんですが、校長はじめだれも信用しない。学校の制度上指導教官というのがあって遠藤を受持っておった指導教官の先生などは、断じて違う、遠藤は決してそんな大物でないと言い切ったんですが、私「いや。そうじゃない」と。「どうして石井君はそういうのか」というので、私「それは僕の教室で質問してくるときの強さ、深さということで赤羽についだ大物である」と。

そういうことで学校に預けるというかたちで受け取ったんですが、受け取ってだんだん警察の話を聞いてみると私の言っていたとおりでした。それから学校でもそれらの処分をしなければならないんですが、ただ研究会をやっているだけなら処分しないのですが、「実際運動になったときは処分する」という文部省の方針が既に出ていました。ところが、どういうときが実際運動になるかが、具体的に学校でもわかりません。「石井君、どうするんだ」というので、東洋紡績姫路工場へ連中が行って職工の労働調査をやっている。赤羽、遠藤が大将と副将で、岡川が書記という役割であった。岡川は思想的には幼稚なんですが「実際運動というのはここらで切るよりしようがないでしょう」という試案を述べ、調査に行った、指図をしたということで切る案を出しました。結局それに従って右三人だけを停学にするか、退学にするかであるが、それについては私は案を出さなかった。三人が退学になりまして、あとはしかりおくという程度で済ませたんです。

岡川はしまいには九大へ行きましたが、私が東大へきてから三潴〔信三〕先生を介して九大で講師にしてもらえるか、もらえないかで、思想事件のあった男だということで三潴先生がピシャッと採用をとめられたという話が聞こえてきました。そこで私はすぐ三潴先生に連絡をとり、事情を一切話したら、三潴先生はすぐに九大に連絡をおとりになって、だめだと言っておったのが一挙に民法の講師になりました。その関係で今日まで岡川君には私はひどく感謝されているんです。

東京帝国大学学生主事に

石井　そんなことで校長は八高へ栄転。近澤さんは文部省の督学官になってくるというところで、思想検事、特高警察、学生主事、生徒主事の制度が、昭和三年秋にできることになりました。その人選問題で若い法学士でそういう仕事のできるやつはおらんかといって探しておったときに、近澤さんがそれだったら姫路にこういうやつがおるがどうだということで、不見転でそれではそいつをもらおうということになり、私は自分の母校だから喜んでやらせていただくということでまいったんです。

――学生主事は大学の意思で採るわけですか。

石井　大学の職員、ことに高等官については絶対に大学総長の意思です。

――先生の場合、小野塚先生がお会いになって決めるとかいうことではなくて、今のお話ですと不見転ということでしたが、その推薦があったら、それでそのまま採ったというかたちですか。

石井　それは若干は探りは入れられたかもしれないけれども、たぶん近澤さんがこういうことで大正十三年のときに京都帝大事件でこういうことをやったんだとか、処分案の段階をどこで切るかといったら、この男が切ってそこで処分した、それで物議もかもさずうまくいったとかいう話をしたんじゃないかと思います。当時、大学の書記官で文部大臣の秘書官をやっていた菊沢〔秀麿〕さんは、東大の庶務課長であって、その下へ後に江口〔重國〕君がきました。菊沢さんとは私は一面識もなかったんですが、採用がきまったときには菊沢さんが私に質問したり検査をするというようなこともなく、もう大体知っておられたようです。

――今のような場合、菊沢さんの人事の発議はどちらからですか。大学のほうからですか。

石井　抽象的な条件は中田薫先生の「若い法学士を使ってやる」ということで、発議はもちろん小野塚先生と中田先生だろうと思います。

――文部省とこちらと兼任でやる状態というのは、かなり後まで続いたんですか。

石井　菊沢さんのときがいちばんおしまいだったと思います。その前に西山政猪という人がありました。これもあとで文部省の局長をやった人です。あの当時、局長制度はなかったんですが、当時の庶務課長、つまり書記官は相当格が高かったんです。私になって初めて事務監という監の字を書いた時代がほんの短期間あって、そのときから勅任官になったのです。こちらは書記官という時代には勅任はなかったんですが、菊沢さんなどは向こうでは文部大臣の秘書官でやっておりましたし、秘書課長もやっており、そしてこちらと、ここの卒業生ですから、菊沢さんは文部省のほうに引きずり回されるよりも、むしろこちらの線からいって、小野塚先生が鳩山〔一郎〕文部大臣の恩師ですし、鳩山さんは宮中で任命されたすぐその足で東大へきて、小野塚総長に向い「先生、文部大臣になりました。どうぞよろしくお願いします」。総長「うん、そうか」と、いうことであったのです。

――先生がおいでになったときは、まだ学生監室と言っていたわけですか。

石井　そうです。

――学生監室というのは総長直属ですね。

石井　はい、学生課というものはないんです。

――それが学生課になると同時に学生監というのではなくなり、学生主事が置かれたということですね。

石井　そうです。安藤さんが学生監でやっておられたときに、結果から見ておると大学当局は困り抜いてしまわれていたのです。左翼でないしっかりしたものというと、運動部の中心になるような連中がいちばん頼りになるし、こいつを使わなければならんということでした。私がここへきて月給をもらうようになったときに朝九時前後から夕方暗くなるまで毎日働いていただいておった月給が百五十円でした。ところがその運動部の連中は何もせずに毎日ブラブラ遊んでおって、俸給日になるとここへきて二百円ずつ月給をもらっていったのです。

――その人たちは嘱託か何かですか。

石井　嘱託です。

――ここのところに嘱託としてずいぶんたくさんの名前が並んでいますが、それはそういう人たちですか。

石井　そうです。

――花田大五郎とか。

石井　これはもとの学生監です。奥山信一君は大学新聞の中心者、豊田久二君は最後に千葉の大学の学生主事になったんですが、検見川のゴルフ場をしまいにはほとんど自分が独占しちゃって、総大将でやっておった人です。それから芦田公平君、これは陸軍士官学校の教授で二十四、五日の月給日だけここへきて、私どものソファのところで、朝十時ごろから晩の五時まで足を組んで、ヨタをとばして帰りに二百円ポケットに入れて帰る。これは野球の関係の有名な人です。茂在さんは内科のお医者さん、斎藤一男君もお医者さんで整形外科です。茂在・斎藤両先生は今の保健センターを育てたんです。ことに斎藤君は体の小さい人でしたが、まめによくやってくれた。藤田路一君これは一高の人と思っておったんですが、後には独学で学位を取って、しまいにはここの薬学部の講師でしたか、短期間教授にしてもらって退官した勉強家ですよ。長谷川・大沢は知りません。斎藤凞というのは一男君の弟です。猿渡、この辺はお医者です。

まだ奥山君は大学新聞をコントロールしておったから相当苦労があったが、貧乏ゆすりばかりしていて、笑いの種子となった人も若干はあったのです。

結局、これは安藤さんを中心にというか古在内閣自体ではどうにもならないから、骨っぷしの強い子分をたくさん持っているやつ、そして左翼にのせられない運動部関係のものをということで、これがゾロッと嘱託でおりました。

それが小野塚内閣のやり方のほうがだんだんまとまっていったものですから、これらの人々は影が薄くなっていったんです。

古在総長から小野塚総長へ

石井　そこまでいく前に、悪意など全然おありになった筈はないが、古在先生が何かで、大学行政についてロを出された事があったのです。小野塚総長事務取扱に「一切大学の行政をやってくれ」と古在先生が云われて始まった事務取扱制であっただけに、小野塚先生は憤然となられた。

古在先生と安藤学生監、農学部の川瀬〔善太郎〕名誉教授、この方は相撲の強い人で、相撲をやって片耳がちぎれちゃってないという、おもしろいおじいさんでしたが、その外にまだ農学部の誰かがおられて、古在総長を中心にして右の三、四人の人が赤門を入ったすぐの右脇にもと営繕課の建物があって（注・現在は小石川の植物園の中へ移されている。もとの医学部の建物の一部が残っていたもの。）、建物が大きいものですから、二階がほとんどガラガラになっていたところへ、古在先生を中心とした前記三、四の元老が陣取っておられた。ちょっと院政の形でした。

私共学生課はこちらの安田講堂におりまして新天皇の小野塚天皇のもとでやっていて、どうかして用事があって院政殿へ行くと、恰もおじいさんのところへ伺ったようなつもりになるんです。小野塚先生にやってくれと言って、古在先生は保養のために大部分は房州の長者町の、別荘ではなくて旅館だったと思いますがそっちに行っておられましたが、あるとき何かで出てきて大学の中で指図めいた言を発せられたことがあったそうです。それを聞きつけて小野塚先生がかんしゃくを起こして「おっ、古在君、やれるのだったらやり給え、おれはもうやらん、おまえがやれるんだったらおまえが総長をやれ、おれはもうやらん、事務取扱をやる必要がないからやらん」と言われたのです。それで古在先生は一ぺんにまいっちゃって、「いや、悪かった、悪かった」と。そこらは古在先生はおとなしかったんです。

そういうことで結局小野塚の法治主義でいくよりしょうがないという空気に、だんだんなっていきました。

学生課の人々

石井　ほんとうは九月早々ぐらいに、特高警察とか学生主事とかいう制度の勅令が出るはずで、私は姫路に籍は残っているけれども辞任してこっちにきてしまっていた。ところが陛下が東北の大演習においでになったがために、勅令そのものがでず、私どもの身分を動かすことはできない。結局、名前は姫路高等学校教授で私はここに一〜二ヶ月ブラブラしていました。姫路の校長からは石井君もそう長くなるようだったら一度辞職してくれなんてまで言ってきたので、「自分は知らん。自分は関係ないことだ。陛下が東北へ御旅行のため、官制が出来ないからで、自分の力ではどうにもならないのです」と言って、菊沢さんにこの話をしたら、今度校長がきたときに文部省で菊沢さんから校長が事情を説明され、後日私のところへきて陳弁これつとめておられたのですが、結局何日付か、勅令が出ました。ほとんど同じ十月末でしょう。

――十月三十日です。

石井　そうでしょう。大演習からお帰りになって勅令が出て同時に発令もあったのです。妙なことで私が何も筆頭になることはないのに、外から入ってきた学生主事が私以外になかったものですから、竹内さんが課長になるはずなのに、どこかの記録によると私が初めに書かれたりしたものが残っている。

――これだと竹内さん、小川〔義章〕さん、石井さんとなるんですね。

石井　小川さんがきたのは翌四年の四月からです。

――この職員録は四年十月現在のものです。

石井　それで学生監ではあったし、安藤さんの下の竹内さんは法学士でしたので竹内さんを中心にやるんだということです。小川さんというのは哲学の文学士ですけれども、これは五高の教授としての知り合い関係で、竹内さんが「小川君きてくれ」ということだったそうです。だからもともとのインティメイトの友人二人のしっぽへ、全然顔も知らない私が加わったというかたちになります。私は、非常にお二人によくしていただいたから、江口君なんかやきもちを焼いて、学生主事のやつら三人は、便所まで一緒に行くって（笑）。そういうことでございました。

――この職員録を見ますと、学生主事が三人いらっしゃって、そのほかに書記、学生主事補、それに先ほどおっしゃった嘱託という構成ですが、学生課に日常的においでになる方は、どのくらいいらっしゃったんですか。

石井　日常的におりますのは書記、主事補までです。斎藤君、茂在さん等もお医者さんとして出勤は多い方でした。岸道三君は医師ではないが割合出勤率の高い方でした。後に高速道路公団総裁の初代になったおもしろい男ですよ。

――岸さんはたまたまここにいたんですか。短い期間でしょう。

石井　いやいや、ここの草分けですよ。ですから道路公団の総裁になる前には私が対支文化事業の金で北支、北京から南京のほうへ行った時この人も何かの関係で一足先に北京へ行っており、寂しい北京でちょうどいいからと二人でくっついて、北京から汽車で南京経由上海まで一緒に行ったこともあります。この人は豪傑ですから、海軍にも知人が多く当時北支から南京のあたりは陸軍もだめ、外務省もだめ、いちばん信頼が置けるのは海軍だといって、海軍の武官筋なんかをたどって、岸君が私を連れて行ってくれたことがあります。

――岸さんはなんでこのときに嘱託になっているわけですか。

石井　やっぱり運動部の親分ですよ。斎藤さん、茂在さん、猿渡さんは医局の関係です。

――その方たちには別に部屋があったんですか。

石井　このいちばん下の北側で会計と背中合わせで東側にありました。

――医務室という部屋があったんですか。

石井　医務室も、これも古在先生がムチャクチャですから、文部省の予算も何も取らずに勝手にぐんぐん作っちゃったのです。これはまた古在先生のいいところで、会計検査院から検査にくるとどこの役所でもふるえあがったものだそうですが、古在先生は検査官がきたって

昼めしひとつごちそうするわけではない。せいぜい課長級のものが白十字あたりの料理を取って食わせてやるだけです。ことに古在先生に向かって最後には大学にいろいろな注文というか注意していかなければならないし、「古在先生にごあいさつを会計検査院の連中がしたいといいますから」というと、「うん、そうかよし」というので、総長室に訪ねてくる。検査官が総長の執務室へ来てもやっこらさとして椅子から立つでもなく、知らん顔して足を御自分の机のふちにかけたまま、靴の裏を客の方へ見せたままでいられる。運動の設備に膨大な金を予算も何もないのに注ぎ込んでしまわれる。その手ででき上がった別の施設に学生用診療所の医局もある。小児科と婦人科がないだけだ。そりゃおもしろい人ですよ。会計検査院の検査官は、徹頭徹尾靴の裏を見ただけで、小さくなって帰って行ったものです。

――いろいろ文句をいわないで帰って行くんですね。

石井　よういいよらん。それでも予算にないんですからとおそるおそるいうそうですよ。「予算にないことですから、総長あれだけはやめていただきたい」といわせておいて「いかん。」それでおしまいになったものです。

それで運動部の親分たちは古在先生にほれ込んでいたんです。そのあとへ出てきた小野塚先生は合理主義で、ピンセットで隅をつつくようにくるでしょう。非常にそこが違う。第一線でつつく役に立ったのが小川さん。竹内さんは開店早々病気になって半年ぐらい鎌倉に療養に行ってしまったんです。私は十月からきているけれども、遅れて四月からきたのが小川さんで、総長は間違えてしまって、ぼくが先にきているからぼくを学生課長代理に発令をしにかかられた。小川さんは私より先輩ですから、それを私は偶然に聞いて知って発令直前に総長のところへ行きました。「先生、私を学生課長代理になさる案が進んでいるやの話ですが」、「うん、そうだ」、「先生、だめですよ、小川さんが私の先輩なんですから、小川さんでなければいけないんです」、「ああ、そうか」ということで、西も東もわからない、哲学をやった仙人みたいな人が学生課長代理にされて、小野塚先生、中田先生から出る注文で、運動部のあの連中を締めろ、大学新聞のあのやり方は何だとくるでしょう。それを小川さんが役目上から、総長の言のままにやろうとするものですから、おとなしい小川さんがこの連中に一ぺんつるし上げを食ったことがあるんです。その運動部のうしろにはそうそうたる教授がおるんです。

いちばん印象に残っているのは船舶の井口常雄教授。井口先生は何やらの運動部の部長で、ぼくのおるところで毒づいて小川さんの面罵をやったりしたんですが、ずっと後になって井口先生が半分冗談で、「どうも諸君に済まんことをいいまして。今でも時々悪いことをした。恥ずかしいと思う、どうぞ許してくれ」って。酒を飲む人ですから、何かのときにやかん酒を学生が持ってくるでしょう。やかん酒を飲んだ勢いで、ぼくは直接受けておりませんけれども、小川さんにやったやつはみんな一緒にきているというので。後に第二工学部長になったおとなしい人ですよ。おとなしい人ですが、その当時は運動部のそうそうたる連中の空気を受けているものだから、この連中はブウブウ言ってみたって自分たちは嘱託の身分で、大きくいえば学生課のこ

ぶとしてくっついているから月給がもらえるんだから。井口先生は学部の教授でしょう。高等官といったって本部のそんなものは眼中にないというところだから、ばか呼ばわりをする。

――そうしますと、学生課は運動部関係や大学新聞を管轄していたわけですね。

石井 はい。

学生課の仕事

――学生課はその当時どういう仕事内容を持っていたのか、簡単にお話しください。

石井 一口にいうと学生に関する事項です。そして学内の秩序も火災も治安という問題で背負っていたんです。当時、一台きりでしたけれども蒸気ポンプがあったんですよ。

――大学が持っていたんですか。

石井 大学の今の竜岡門を入ったすぐ左脇が外来だったんです。私が一人おったとき、ちょうどいまごろの小雨の降る宵のうちから火事になりました。

――それは木造家屋ですか。

石井 ええ、それで大学の蒸気ポンプが第一に出動して、あとは消防署の車がくるんですが巡視連中はそれを十分に操作できたんです。

――だれが操作するんですか。

石井 門衛をやっている連中がみんなで。

――そうすると門衛なんかもその指揮下にあるわけですか。

石井 彼らは私どもの指揮下の第一線の兵卒ですよ。治安といってもどろぼうの問題もあれば、火事の問題もある。いちばんやっかいな問題は巡視に帯剣させろ、あるいは少なくとも樫の棒一本は持たせろという議論が、これは私がくる前から出ておったんです。

――それは別にどろぼうに対してということではなくて、学生運動に対してですね。

石井 はい。これは新人会と七生社との衝突の問題です。

――そういう学生問題の中では思想問題、つまり左翼運動問題がいちばん大きな問題だったんですか。

石井 それがいちばん大きかったんです。

――そのほかにはどうですか。

石井 学生は若いものですから、たまに異性問題もありますけれども、こんなものは大した問題ではありません。そして大ていそれは卒業間際になって、女のほうが卒業されてしまうと逃げられるということで、卒業間際にガーッと食い付いてくる。それで学部だけでやっておられることもあるけれども、どうかすると私どもの耳に入ってきて、学生課で調べてくれとかいうことになってくる。これは学生監のころからの延長でしょう。それでやりますと大ていは女が年がいっているんです。結局、お膳を据えるんですね。卒業期とて、出来るだけ示談で片付けさす態度を主として仲介するが、女の方が卒業を妨げ自己の主張を貫こうとする態度に出そうな時には、お膳を据えた責任を追求して、反省させる態度を示し、学生をかばう態度に出て大体は円満示談させ得たものです。

——大学新聞の問題というのは、何かゴタゴタあったんですか。

石井　大学新聞は、左翼の主張を左翼が意図的にやるから、記事が左にいくんです。これのいちばん文句のよけい出てくる先というと、全国の高等学校です。高等学校の治安がこれでひどくかき回される。奥山君はそれで相当苦労してよくやってくれました。

——その方は影響力を持っていたわけですか。

石井　ええ奥山君はある程度は。時にはそうおっしゃるけれどもそうばかりもいきませんからともいわれたこともあったが、私より奥山君のほうが年は上だったでしょうから大体よく協力をしてもらいましたよ。ある期間は私が一人で学生課の仕事をやっていたこともありますが、新しく発刊された場合でも私が凡て自分でじかに見る制度になっていなかったので、私が見ないでおいたって、地方の高等学校なんかいろいろな話がありますから、「ちょっと奥山さんきてくれ」といって、「これはどこどこの高等学校からこういうことを言ってきた、これは言葉が違う、こんなことをやられたら困るといって高校側から交渉がきているから、あなたからひとつこんなことを繰り返しやらんように大学新聞の指導を頼みます」と、大体、そういう話をしたものです。

——運動部関係のこともやるんですか。

石井　それは運動会という財団法人がひとつ立ててあって、もとは学友会とかいってたものを解散してしまって、スポーツの部分だけの運動会を立てて、これは民法学者の穂積〔重遠〕教授の入れ知恵で、「目的実現不可能」というような理由で解散したんですよ。壊すときでも学生の支持する層というのは、運動会の連中をまずまとめて大学側にひっかかえておいて、法律手続きとして穂積案でスポッとやって、涼しい顔をしておったんです。左翼のほうからいうとペテンにかかったんだから怒りますよ。怒るからここで何かにつけ、当時は十一月七日のロシア革命記念日、それから一月何日かの三Lデーで、レーニンと何やらでもう忘れてしまいましたけれども、そういうようなことで向こうは年中行事式にやってきますよ。私どももだんだん覚えるから、一週間後には左翼からやられるぞ——と。こういうことを警戒しておけというふうにいきますが。その何といってもいちばんの頭痛の種子は左翼でした。

大内事件と内田総長

——当時の左翼は表向き日本共産党と名乗ってやっていたわけではないんですね。

石井　私が東大へ就任してきましたころまでは、まだそこまではいっておりません。主として学内は新人会です。私がきましてから満州事変までは登り坂で、これは激しかった。そして日本共産党とその実態はここの連中の日本共産青年同盟で、ほとんどここの学生でした。これは強くやりました。

——それは実際にどれくらいの力を持っているとか、そういうことはおわかりだったんですか。

石井　全部調べていました。

——それは警察のほうの情報ですか。それともご自分のほうでお集

めになったものですか。

石井　これはよく不思議がられたんですがその調査のコツを工夫したというか、教えてくれたのが同僚の小川学生主事なんです。初めは、こんな人何ものなんだ、だれが呼んだということで、何かいえば怒るしと思ったんです。事件が起こるとそのときは一応のことで騒ぐだけは騒がせておいて、そのうちにだれか一人が警察につかまったとか、そうでなくても偶然につかまったとかいうことで警察の調書なんか出ることもある。

警察のほうとは連絡はつけてありました。本人の書いた調書はちょっとしたものでこれくらいになります。しまいには本富士署なんかは大てい最小限複写で三通つくらせるんです。一通は警察、一通は検事局、一通は私どもにくるんです。それを読んでおってうそもまことも混ったままで読んで、それからが小川さんのコツなんです。黙ってそいつを読んで出てきた名前を書いておくんです。そしてその関係者のだれかにまた問題があったときに呼んで、こっちでいわずに聞くんです。聞いては書き、聞いては書きですから、一人に大体三時間ぐらいかかりますね。それで書いていくでしょう。またその中の何れかを呼んできて聞いて、それをこうやっておりますと、網の交差点にみんな出てくる。ですからそれは警察のほうがよく知っておるものもあったが、警察のほうも知らなかったものもあり、ここで発見したものもめずらしくなかったのです。

年月日は忘れましたけれども、農学部の何とかいう学生の手記を見ておりましたら、それがいわゆる資金カンパです。共産党の活動資金を寄せて歩いている。そして大森義太郎とか、山田盛太郎とかいうようなところを、その研究室へ行っては「カンパをくれ」「カンパくれ」とやっている。続いて大内〔兵衛〕教授のところへ行ったんです。そうしたら一対一でほかにだれもおらんところで大内先生に、その農学部の学生は、「先生、活動資金をほかでももらっているので、先生もください」と言ったところ、大内先生「おれはやらん」、「なぜですか」、「おれはマルキストではない。労農派だから、いやだ」。それがその学生の手記に出ているんですよ。それは偶然のことで警察に学生がここでつかまった場合、大抵本富士にある。本富士にある場合は全部くれますし、ほかのでも回ってきます。それでどうも利害関係のないところで、しかも大内先生一人の研究室で一人で入って相対でやっておって、「おまえにはやらんよ、おれはマルキストではない」ということを言っているんですから、こんな確かなものはない。それを小川さんと私と二人で小川さんが思想関係を担当し、私が共済関係といいまして、今の福利厚生の関係を担当しており、小川さんが文部省へ転任して行ったときに私が代わって思想関係を担当するようになって、私のあとを、若手の大室〔貞一郎〕君其の他の連中が、継承してくれたというかたちであったのです。

それで前記学生の手記を小川、石井の両人は共に読んで知っており、昭和十三年二月というときは、私も小川さんも教学局の役人になっている。そのときに突如として内務省系統で大検挙があった。新聞でチラッとそれを見た瞬間に、小川さんも私も自分の家におりましたが、けしからんことをやった、これは大変なことだと思いました。戦

時下であるから強引な起訴をやるだろうが、結局のところは数年、どうかすると十年近くかかるが大内先生は無罪になる。無罪になるにしても大変な犠牲になって、ひどい目に会ったらお気の毒だと思って、文部省へ出て行ったら、文部省の中ですでに首脳部のほうが、大内先生を即刻罷免するか、少くとも休職処分にしろということを口走っていることが耳に入ってきた。「それはいかん」と言って、私共二人は大内先生の問題は文部大臣に傷が付く。そこで小川さんと二人、東大時代から肝胆相照らしてやっておったものですから、そのときも一緒に行って文部省の教学局長官菊池豊三郎氏を中心に数人以上の主脳部に向って大内先生を検挙してはいけない理由を説いて廻ったが、なかなかわからない。わかっても、口にはそういう人々は仲々出しません。陸軍か貴族院からの圧力がきておりますから、そいつをやかましく言って、必ず無理をやってこれは起訴するでしょうけれども、大審院までいって無罪になる。その前に処分しておけば、その処分をした文部省、具体的にいえば文部大臣に傷がつくんだからやってはいけない。大内先生からもちっとも連絡はありませんし、学生課の動きと経済学部あたりのちょっと自由主義的な教授、助教授は、口にはお出しにならないけれども、学生課の野郎という空気は腹の底にはあった時代です。しかし私どもは筋の上からいっても大内教授なんかに手を付けてはいけないという一心でやり抜きまして、ようやく小一日かかって文部省は「押し切ること」だけはやめたんです。

その後、私は北支勤務などを済ませてこの東大本部へは十七年からもどってきました。その後、終戦直前でしたから二十年の晩春（注・十九年九月）のころではないかと思うんですが、大審院で大内先生無罪の判決が確定しました。私はそれを見て予想通りだしよかったと思っておりました。が、それもそれだけで戦争のまっ最中ですからほかの用事もありまして、そのことはもう頭になかったんですが、総長の内田〔祥三〕先生が私と二人きりのときに、「石井君、大内君に辞表を出してもらおうと思うから、きみ、済まんけど呼んできてください」という。これは大変なことだと思って、「先生、それはいけないですよ。いままで申し上げておりませんけれども、昭和十三年の検挙の日から私は関係しておりますし、私の予言しておったとおり大審院の判決で無罪になったんですから、無罪になった人をここの教授から追い出すということは理由が立ちません。それはいけませんよ」と言ったんです。第三者のいらっしゃるところでは、使われておる者としてそこまではいえませんけれども、二人だけでしたから私は総長に過ちなからしめることが私の仕事だと思っているから、じっくりと申し上げたらしばらく口をつぐまれてから、「石井君、総長はぼくですよ」と云われた。「それは私もよく存じ上げております。そこまでおっしゃるのなら何も申し上げません」、「わかったよ。それじゃ石井君、呼んできてください」。いやなことだと思いましてね。これは総長に傷が付くと思って法律の筋を申上げましたが、もう仕方なく、車が不自由なときでしたけれども、ここに一台だけ残してあった車で行って、大内先生にそんなことはいえませんから「きてください」といいました。その翌日でしたかこられました。どういう用事か私はよく知りませんし、こられたら総長と二人だけで相対でやってくださることと想

像していたのに、ぼくを呼びにこられて、「石井君、ちょっときて、きみここで立ち会って下さい」といわれた。総長と大内教授と私との三人だけでしょう。まるで私が相棒でやったようなことになってしまったんです。

「せっかくなんですけれども大内さん、辞表を出してください」といわれ、当人の大内先生も意外だったんです。「私は無罪だったんですよ。どうしてそういうことをする必要があるんですか」。「いや、こういう重大な時期（注・二十年の六・七月頃）ですからそれは大学として困るんです」という押しの一手ですし、法律屋としてならばとてもそんな無理はいわれないんですけれども、大内先生もとても通じないと思われたんでしょう。私もその前にアドバイスしたつもりでおったんですが、ピシャリと「総長はおれだ」といわれたものだから、そこでは大内先生に、私はこうだったとはいえず、結局、大内先生はそれでは辞表を出しますと言って帰られた。が、意図的に引っぱられたのか、手続きをやっておられた途中で終戦になってしまいました。すると、刑務所に入っておった共産党の連中までみんな出てきたんですから、自然消滅であったばかりではなしに、各学部の思想関係者が一斉に帰ってくることになってしまったわけです。

終戦直後

石井　思想関係者が出てくるのは当然のことと思っておりましたが、そうしたら内田先生が、「石井君ぼくは辞表を出します」というわけです。ぼくは敗戦の責任というかたちに見えるが、実際問題としては大内先生その他がゾロッと帰ってきたところに、総長としてはとてもおれたものではない、総長もそれは見ておられて問題だろうと思ったから、私もこれは何もようお止めしませんでした。それで結局、間もなく「辞表を書いてきたから石井君手続きをしてくれ給え」とおっしゃったので学部長会議に集まってもらいまして、総長からこういうものが出ましたからということで、もちろん総長も同席しておられました。学部長会議でそれを相談したところ、どなたも止める人もなかった。それが京都大学から東北大学へおのずから響いていきました。お気の毒ですけれども全国のおもだった大学の総長、学長が全部辞表を出してしまったというかたちになったんです。

しかし、それも歴史上のひとつの問題ですし、大内先生も、気の毒だから言っておきたいしするが早くはいえないということで便々としておりましたうちに三十年経過してしまいました。そして幸か不幸かその直前に内田先生はお亡くなりになりました。私は大内先生にだけは事情をお話ししなければと思い、今のことをかいつまんで書いて先生のお耳へ入れたところ「いま四十年後にしておもい起こし、感謝にたえず」との御信書に接し些か安らぎを回復した次第です。

学生の福利厚生と思想問題

——話を少しもどして、学生主事として福利厚生のほうを最初はご担当だったということですが、日常業務としてはどういうことでしょうか。

石井　あの当時は学資の足りない学生が、相当たくさんおりまし

た。それから医局も古在先生の豪放なやり方のおかげで伸びて軌道に乗ってよかったんです。これもまたたくさんの連中が助かったんです。しかし、それは主にお医者がやってくれることです。いちばん事務的には学資の紹介で、その当時にどういう方法でできるかはわからんが、将来は国費でやらなければならない。それがいますぐにできないんだから県人会、あるいはもとの郷里のお殿様のなにかそういうもの、それから実業界の貝島炭鉱とか、そういうようなものは、ここは第一流の学校ですからわりあい手をつかねていても提供してもらえたのです。

——奨学金のようなものですね。

石井　そういうようなものは、くださるからといってだれにでも、出すわけにはいきません。中にはひどい学生は三つ四つひっかけて、こちらから五十円、こちらからも三十円、向こうからも四十円もらっている。そういうやつも全部組織的に調べて、ここに呼び出して「おい君、奨学金をどれだけどこからもらっている。一口、一つだけか」というんです。そこへいくとある程度人格問題でございましょう。それで突つき出してしまって、二つぐらい手をかけたりしている。「まだありゃせんか、困っておる連中がたくさんおるから余りに重複して貰うことはよせよ」という指導をしたのです。一応の標準を月額六十円と抑えておりましたが、ちり紙一枚でも自分の金で買わなければないという学生もおりまして、そういうのには例外的に五円ぐらいよけい出しておりました。どうしてもそういうものが見つからないときには、私が苦労してそのおやじさんにまき割りをさせたりというようなこともやっておりました。意味のないこととは思っておりませんが、いちばん考えておりましたのは思想問題のほうでした。

——新人会は昭和三年に解散になりましたが、そのあとはこちらのほうで学生の動きをつかまえる場合に、共産党あるいは共産青年同盟というかたちで。

石井　そこへいく前に数十の読書会（R・S）というものがあった。ちょっともどって恐縮ですが、昭和三年十月から学生課が開店したのですが、間もなく竹内さんが病気で長期療養ということになり、小川さんは次の年の四月一日から来られるのでその間は私が一人で学生課の仕事をやっておりました。当時東大には手許の学生の思想動向を知る資料が何もないんです。それで最初にやりましたのが毎年出ております要覧を利用して全学の学生の大まかな調査をすることとしたのです。要覧には各学部の学生が、文学部なら西洋史とか東洋史、日本史というふうにびっしり人名が印刷されているので、それを台帳にして、「巡視の報告」というのを毎日提出さしておりました。学内のどこで例えば三高のR・Sとか、大阪のあるいは仙台、又は福岡等の高等学校のR・Sが開かれたのについて、巡視の報告が出て来、夫々の出席者の名前が出てくる。それは隠すやつもありいろいろありますけれども、とにかく出てくる。それは少なくとも赤い問題に縁故、興味のある学生だということです。今の総長（注・林健太郎名誉教授）なんかも当時は学生としてその中に出てきたんです（笑）。そして台帳の名前の上にマッチの軸に朱肉をつけて一つずつ赤点を打っていく。これをやりまして小川さんが五高から来られる四月までやりまし

二六事件のときにここにおってあぶなくなったんで、ここの前に銃剣を付けたのが立ったりしまして、小川さんは左翼だけで、私は前に興国同志会のほうの関係も若干あったので右翼のほうの材料も寄せておりました。そうすると二・二六の右翼系統の連中がガサにくると、左翼のビラはいいけれども、右翼のビラはその連中から見るとしゃくにさわるという感じがしたものですから、そこで大学の呼びつけの、病院の口にあった森田という車を呼びまして第三グループの石井専用のビラを運びました。私のところには昔の土蔵があったからそこの二階へ入れるつもりで、私はこっちにおるが空車で、これを何とかひとつ無事におれの家へ運んでくれということで銃剣を立ててみんなそこにおるその中を通っていくわけで、シートの下にふろしき包みを入れて行ったんです。その中にこれが若干入っておったつもりでおりましたが、あとで一生懸命探しましたら、たしかこんなようなものが一部だけ出てきました。それは南原先生には一つしか出てこなかったということでお渡ししたんですが、私もなくなってしまったんです。これは図書館へも納めたはずなんです。これはどこから出てきたんですか。

――古本屋から買ったもので、昭和七年というのが奇妙にたくさん出るんです。八、九年というのは非常に少ないですね。最初はわかりましたけれども、後のほうはいつごろまでお出しになったんですか。

石井　八年ぐらいがしまいじゃないでしょうか。

――後は大したことがなくなったということですか。

石井　いいえ。もうここらへくると満州事変で左翼運動はわりあい下火になったんです。滝川事件あたりが学生の左翼事件としては余波と申しましょうか。大したものではないんでした。

――これは情勢が変わったということですか。それとも特高のほうはどんどん検挙して。

石井　それもありますが、やはり満州事変以来、軍国主義的な空気が強くなってしまったということです。それがあとはこの辺からこれもお耳に入っておるかもしれないけれども、八年に配属将校問題があって、これなどは毅然としてここで陸軍と大げんかをやったんです。ですから問題は変わってくるんですよ。左翼事件はゼロにはなりませんけれども、ここで見ましても昭和九年には材料が少なくなっています。そしてこんな具体的な推移過程を示す手記の実例なんていうのを入れておりますが、初めのころはこれを出すだけでいい加減分量を食ったんです。そしてたぶんここらではみんなイニシアルが書いてあって、もう今は忘れてしまいましたけれども、これはだれそれ、これは何学部のだれそれということはみんなわかってたんです。

戦火を免がれた学生ビラ

石井　結局ビラはそういうことで、第三グループのいちばん貧弱なものを持って行って、私の土蔵に放っておいて、私のところは焼けたけれども、土蔵ですから助かりました。土蔵の二階でほこりだらけになっていて、ワラ半紙ですから汚くてしようがなかったんですが、どうも大学の分を蚊帳に包んで燃してしまったということを聞いただけに、ああ、惜しいことをしたと思いました。そこでもう私の持っているのが、少なくとも東大に関しては一番の資料になったんです。これ

は表装するほどの根気はありませんがどうしてでも、そっとしておいて、できれば東大の図書館にでも差し上げようというつもりでおって、せがれ（注・石井紫郎法学部教授）にもそういうことは口走っておりましたが加藤〔一郎〕総長の時代に大学新聞の五十年記念のパーティーでちょうど一緒になりまして、若干のむだ口をきいたついでに、「実はこういうものがありますが、大学のどこの部門にしたらいいか知りませんが、新聞研究室か図書館か、とにかく差し上げたいと思います」と言ったら、加藤総長は、「ありがとう、もらいたい」と言っておられたが、どこへという話まではならなかったんです。そうしたらせがれが、いい子になるつもりでしょう、おれが持って行こうと言って。中には意外なものがあります。その後ぼくは北京へ行ったものですからね。これはほんとうをいうと広い意味の軍機に関するものがだいぶ入っていたんです。北京へ行きましても私は主たる仕事の担当は何かといったらそれでは思想事件を受け持とうといって、「思想と宗教」をやっておったんです。そして引揚げて九大へ移るときに捨てて行こうかと思ったけれども、これも何か惜しいようだし、かといって持って汽車に乗ると、あの当時山海関と新義州で形式上ですが税関が調べたんですよ。私は軍属で行っておりましたから、将校行李に入れて持ってくると比較的フリーパスはしますが、持ってきたい荷物もたくさんありますので、軍司令部で、「どうしよう、あれは捨てて内地へ帰ろうか」といったら、それでは「軍のものということで送りましょう」ということで、軍の飛行機で九大まで送ってくれました。それで妙なものが入っておりますし、まるでくずみたいなものも入っております。

せがれが持っていったのでどこに入っておるか知りませんが……。

——明治新聞雑誌文庫に入っております。

石井　もうあれは非常に減っちゃったんですよ。いちばん参考になるだろうと思うのは『赤門戦士』だと思いますが、いちばん印象に残っているのは、天皇は大地主の大資本家だということです。その実例として木曽の御料林を持っている大地主である。それから大資本家ということは、日本郵船株式会社の大株主が天皇だということです。また、これは私が大正十三年に明治大学の『法律及政治』という雑誌に「憲法私見」と題して、若僧のお恥ずかしいものを出したんですが、その中で日本の天皇が地主であったり、財産家であるというようなかたちになる、いわゆる財力、権力の上に立っているという考え方は、日本の天皇の性格をはき違えている。明治維新のときの伊藤博文の千慮の一失、ドイツの皇帝をまねた行き方である。皇室財産制度は撤廃すべきだということを私は書いたんですが、若僧が書いているから誰も問題にしなかったんです。

その後、今度は文部省で思想会議のときに私がその説をぶったものだから、文部省ではあわてて、「戦争は苛烈になるんだから思想問題の上において、やらなければならんと思うことがあったら、遠慮なく非公開の場だから言ってくれ」と言いました。後に次官になった伊東延吉さんが思想局長で、そこには検事局、警保局、警視総監、思想検事、特高関係、陸軍、海軍の大体佐官級から少将までの連中が三、四十人ばかりオブザーバーで来ておるところで私はぶったものですから、

文部省は大変な騒ぎになりました。「取り消せ」、「取り消さん」。「首を切るぞ」、「切ってみろ」。「起訴されるぞ」、「しかたがない」。「ぶち込まれるぞ」、「しかたがない」。やられたんです。小野塚総長が後方で持ちこたえて下さったので、文部省もそれ以上には私を問責しなかったのですが、昭和六、七年の『赤門戦士』にここの学生が六、七人ひっかかって牢獄へぶち込まれたんです。天皇の大地主、大金持という記事を書いたことで起訴されたんです。やり方が悪いんだ。指摘したやつも悪いけれども、指摘するような材料を作っておいて罪人をつくった形であった。

学生主事の新設と発令

――昭和三年のことになりますけれども、学生課ができ、学生主事が新設されたとき、それに対して学生のほうの反対運動はありませんでしたか。

石井　その当時はありません。私は昭和三年の十月にここにきましたが、まだ発令はなかったんです。八月末か九月早々に豊島園事件(注・九月二八日午後、新人会が豊島遊園地にピクニックをよそおい総会を開催。討議中に板橋署員に包囲され、二二名逮捕留置された。)があり、非合法集会ということで問題になったのが、それを取り調べて処分するというのがここの当面の大きな問題になっていて、左翼の連中が反発する動きも何もその当時はなかったんですよ。

――これは三年の十月三十日ですから、ちょうど先生の辞令の出た日ですね。

石井　なるほどそうか。それで私はこのときに出ていたかどうかな。

――石井先生がお名前を出されているのはこれが最初みたいです。

石井　十一月二十九日ですか。初めのころは私は東大職員としての発令を受けていなかったので遠慮して取調べなど公式の仕事の場面には出ないようにしておったんですが、法学部長の中田先生が、どうせやらなければならないから、ここへきてちゃんと見ておってくれという。要するに、おまえに教えるんだからここへきてすわっておれ、ということだったんです。

それから印象に残っているのは、どれか処罰を受けた中に当時の警視総監の親戚か知人の息子がおって、その線でここへきて中田先生を探して、法学部関係らしかったが面会しようとしていたので、それに会いもしないで筒抜けに聞こえるのに、大声で「警視総監もヘチマもあったものか」と、中田先生がどなりつけて、「そんなものは会わん、断わってしまえ」とやっておられ、大変な勢いでした。

――『学生思想運動の概況』を探してみたいと思いますが、配布先はどの程度のところですか。

石井　学内の各学部長宛には大体お分けしましたし、総長はもちろんのこと、それから文部省とか、当時は警察もですが、他に私どもは友人関係で東京地裁の検事局とは非常に深い関係にありました。戸沢〔重雄〕という、いま私の親戚になっておりますが、それが八高の先輩で、近澤さんが、「石井君、戸沢君は八高出なんだ、両方がいいんだから会って連絡をとってやってくれ」というような話で、このおか

げがいちばん具体的に出たのは、山田盛太郎、大森義太郎、平野義太郎の三太郎の問題のときに検事局は押さえちゃって、山田盛太郎などみんなの家宅捜索をやったり、相当なものを押さえてしまったんですが、そのときに内面的に私を通じての話は、「どうしてもやむをえなければ起訴するが、目立ち過ぎるしするから、どうです東大側でこれらの連中を自発的に職から離れさせてしまうという処置ができないか、これができれば起訴しない」ということで、結果においてこれはみんなに喜ばれたんですよ。

それでいちばんやりにくいのは経済学部だろう、赤い人がよけいそろっているからいかんだろう、と思われたのに矢作経済学部長が検事局の内意を伝えられたら、第一に双手を挙げてやってしまったのが経済学部であったのです。そういうことで結局あのときは表立たず、新聞なんかでもちっとは書いてありますが大して知らずに、スルスルと済んでしまったんです。

結果からいうとこれで……。平野さんは、なんだかあとで法学部の教授の連中が、あのやろうは、とか言っておられた。ほかの問題で空気が悪かったようです。

だからあの人は戦後二度ともどってこなかった。山田盛太郎君についてはその前には、「あいつは絶対に教授にしないことになっているんだ。やつは万年助教授ということに決まっているんだが」と言っておられたが、戦後彼はもどってきて教授になって、学部長にまでなっている。

——東京地検と東大との関係は先生と戸沢さんという関係であって、それはあと引き継がれたということはないですか。

石井 異動は少なかったです。私は学生主事としては昭和三年からきて十二年までおりましたが、東京地検の思想検事のうちの一部分も、わりあい動かなかったんです。戸沢さん以外の人でもいまでもあそこの思想検事で交際を続けている人がおるんです。私も遅播きの弁護士ですが、向こうも弁護士をしている大竹武七郎氏とか、司法大臣になった松阪〔広政〕さんも思想検事だった。私よりももちろん先輩でしたが、わりあい懇意にしておりました。それから満州国へ移った何とかいう人もおりました。わりあい東京であるせいもありましょうが、こちらも二十年前後おりますし、向こうも替って行ってもそう大しておらずに、またじきにもどってくるといったようなことですから、両方ともインティメイトになって、年末には向こうが招待してわれわれを食事に呼んでくれることがあり、われわれが呼ぶことがある。総長などは一切タッチしませんけれども、もちろんわれわれは大学の金でなしに、いわゆる友人としてやって、そういうことが結果においてよかったようです。

本富士警察署と東京帝国大学

——本富士との関係はどうですか。

石井 本富士の署長は、大体、判任官級の主事補の人でやっておりました。ただ一度、何とか綱右衛門〔綱島覚左衛門〕という、一高を出てここの法学部を出たおじいさんの署長がおったんですよ。それが初めごろ、私が一人でやっておったときかもしれませんね。昭和四年

ごろですけれども、学内で検挙することはならんということを、総長たちの意向を受けて私が申し渡しておいたんです。それをどうしても逃げてしまって行方不明になっているやつが、三月の試験を受けにくるということを聞いて、網を張って待っているんです。化学の教室と運動場との間のところに床屋がありまして、あそこで試験を済ませて出てきたやつをやってしまったんです。「やってはいかん」、「やらん」という約束にしてあったのにやったから、私は怒ったんです。それで本富士へ電話をかけて、「あなた方は学内から検挙して行ったな」と言ったら、どうも済みませんという。そのときの署長が右に云ったここの卒業生ですよ。悪意じゃないけれども職掌がら、こういうときでないとつかまえられないからつかまえておいて、私が電話で切り込んだら、「大変手違いをしてまことに済みません」という。うそなんだ。やるだけやっておいて普通くるときには背広でくるのに、その日のうちの二、三時間後に金ピカの署長服を着てガタガタ入ってきて「まことに申しわけありません」、「すみませんが総長に取り次いで下さい。総長におわびします」とくる。そういうときは金ピカを着て頭を下げてくるが、つかまえていっちゃうということをやる。

こっちもしかたがない。そういうことをやっていいわけではなく、やられてしまった後ですから。

――さっき巡視守衛のことがちょっと出ましたけれども、あの人たちはそういう能力があったわけですか。

石井　三人ぐらいは、いわゆる門番とか火消しをしない、同じ服装をしておりますけれども、そういう専門の仕事を出来るのを見つけてきたんです。

集会や読書会を許可なしにやったというだけで、これは処罰の対象になりました。読書会なんかに入り込んだりすると学生がつまみ出したり、ワーワー騒いだりするけれども、がんばってそこで記録を取ってきたりして、翌日私達のところへ記録が出てくる。そうすると出席者はだれかわかりますから、私のこれにそれがまたくっついてくるんですよ。今の総長の学生時代の話も申しましたが、それだけを見ておるとほんとうのプロフェッショナル（赤の専門家の意）になっていくのかどうかわかりませんが、この場合はちっとも深入りしていかなくて、いわゆる「学究」として見ていなさったんです。

もう一人頭に残っているのは、ご存じか知りませんが倫理学者の深作安文先生の息子さんが、深作何とかといって、「深作がまたR・Sへ出ている」、「また出ている」と言っておったんですがそれだけで学生大会をやったり、非合法活動にはちっとも名前が出てこなかったんですよ。一、二年見ておって、この種の学生は、R・Sという関係だけでは現われて来るけれども、危険性がない、安心していてよかったと思った。むしろ私は、こういうような人々は、先々、（どうしても思想問題というものはなくなってしまうものでないから）その自らのとるべきところを研究し、見究めるための準備をする人としてこういう人は役に立つ人だな、という感じを持っておりました。

深作さんの息子さんはその後の様子は不明ですが、この種の人々については学生のころからぼくはマークして興味を持っておりました（笑）。総長とはその話はしたことがないです。ごく最近になって元

総長に、お話して笑い合った次第です。

――右翼の勢力と外との関係をきかせて下さい。

石井　ごく簡単に申しますと、社会党の代議士に穂積七郎という人がおりますが、あれの兄さんの穂積五一。あれはもとは鈴木と言ったんです。「鈴木兄弟」と言っておりました。私がこっちへきた当時は鈴木か、穂積か、はっきりしないようなことでした。兄さんのほうはずっと一貫して七生社系統の考え方でおりましたが、七郎君のほうはそういう立場でおったのに、私がここへきた昭和四、五年にメーデーに赤旗をかついで歩くようになったんです。メーデーも私は初めてですから時々見に行ったんですが、カムフラージュでやっているのか、どこまでのつもりかわかりませんでしたが、今はごらんのとおりで共産党ではありませんし、社会党でもどっちというんでしょうか。

私はひところ衆議院へ行っておりましたから、院内で時々は顔を合わせたけれども、向こうも議員さんですし、妙なやつとあまり知り合っておるのはおかしいと思われているかと考えて、知らん顔しておったんです。私が衆議院を辞めて間もなくか、地下鉄の中で筋向かいにおりました。いつも知らん顔をしているし、こっちも知らん顔をしているし、向こうも意識があるかどうかわからないと思っておったら、向こうから「石井先生ですね」といわれて、恐縮しちゃって、「いや、どうも」、「お元気でけっこうです」というような話をしたことがある。それ以上何もありません。

五一君は本郷上富士前あたりに居り、主に東南アジア系統の留学生の世話をしていたのですが、あの人が中心になって、私がここへ赴任してきた当時は私がいちばんの若僧で、三十になったかならんかぐらいでした。穂積君がいちばん年上だったのか知りませんが、穂積君がひんぴんと訪ねてきて、ヨタ話をしながら、私がかつて学生時代に興国同志会（七生社の前身で上杉慎吉教授・平泉澄教授等に指導された国家主義の東大学内団体）におったということで、なおのこと、向こうは気持が楽になるわけです。新人会との乱闘事件等、小野塚内閣が生まれる前のところでは、だいぶ学内で乱闘事件があったようです。その当時は副島種臣の孫に当たるとか、私は会わなかったんですが、その副島も七生社にいてやったんだそうです。

私どもがきてから小野塚先生の方針もありまして、どっちも動かさせないということで、七生社の側の連中は、あなた方の気持はわかっているだけに、あなた方が大学当局からとくに便宜をはかられたということになるとまた混乱するから自重してくれ、わかります、というようなことで、それから七生社という名前はほとんど現われてこなくなりましたところで、朱光会ができた。後では平泉さんが朱光会のリーダーでしたが、もう一人おとなしい年輩の文学部の先生が、ちょっと世話をしておられたことがありました。ほんとうに朱光会の世話もやき、引っ張っていかれたのはやはり平泉さんです。

――文学部の先生方のお名前ですが……。

石井　春山〔作樹〕先生だったかな、毒にも薬にもならないような、おとなしい先生でしたよ。平泉先生は、私が大学一年生のときに興国同志会へ先輩のしり馬に乗って入会したときの大学院の学生だったかと思います。いちばんのリーダー格があの人だったんです。そし

て鹿子木〔員信〕さんは顔は合わさなかったんですが、当時もうひとつ年輩が上でドイツへ留学していました。

私がここへ着任してからの学内の右といえば朱光会で、朱光会の学生はやはり国史にだれかおったんです。二高の校長をやっておられた阿刀田〔令造〕先生の息子さんの阿刀田〔駿郎〕君はいい学生でしたが、朱光会にも出ておりました。折目正しいきちんとした人でした。

――学外の蓑田胸喜とかああいう人たちとのつながりはあったんですか。

石井　蓑田君は東大学生の世話をしたかった様子でしたが、こちらは「あまりあの人には」と思っておりました。それから私が見ておりまして、興国同志会の関係では同時代のこともあったんです。そして私は学生主事できておって一度か二度偶然に顔を合わせてものを言っております。それから私が文部省の教学局へ入ってからは、またあそこへきていろいろ言って来ました。あの人は胸喜の胸の字がけものへん（狂）ではないかということを言った人もありまして、私どもも悪い人とは思いませんがちょっとあぶない、ファナティックになるような気がしましたから、私的に交際は私はしませんでした。幸い学生ともその接触はなかったようです。

久木田義隆という学生が血盟団の関係者になって出てきまして、私は顔は合わさなかったんですが文学部の倫理か何かではなかったかと思います。それは西郷さんの血を引いた男です。それがつい一か月ぐらい前、西郷さんの銅像は鹿児島を向いているのか、皇居のほうを向いているのかという下らん記事を書いておりましたけれども、あの銅像をお世話する会の会長に久木田義隆が出ておりまして、めずらしい人の名前が出てきたと思いました。あれは形式的にいえば法に触れたものですから、学校も場合によっては処罰せざるをえないかとは思っておりましたが、私的には左翼の激しい運動に対して反動的にしたことで、その反動が少し滑り過ぎたという意味にとりうるんじゃないか、そう責めんほうがいいということを、私的感想としては言っておりました。処罰した覚えはないんです。たぶん退学していったんじゃないですか。

――血盟団のときは何人か東大の学生が参加しておりますね。

石井　それも私の意識にあるのは、はっきりと代表的に新聞に出たのは久木田です。あの人はああいう関係で東京にいるらしいから何かで機会があって顔を合わせれば、またおもしろい話が出るかとも思います。

――あのころのものを見ますと、東京帝大小田村〔寅二郎〕学生事件というのが出てきますけれども、あれはどういうことだったのでしょうか。矢部〔貞治〕さんの日記によく出てきます、蓑田さんのほうと関連のある右翼の学生でして、矢部さんをとにかくいじめたんですよ。矢部さんを追及して、矢部さんの学問は反国体的であるということで、矢部さんは気の弱い人だからいろいろ手紙のやり取りなんかをしているうち、その手紙を公表してしまったんです。そういうことでだいぶ問題になって、しかも矢部さんは教授になるかどうかという問題とからんだり、なかなか教授の発令が出ないとか、小田村を処分するかどうかということが法学部で問題になったり、ちょうど先生のい

らっしゃらない時期だと思います。

石井　私は教学局から続いて北京へ二年半行きますから。

——十四年二月に北支に行っていらっしゃるのですね。

石井　三月です。小田村という名前は聞いたんですが、私の頭にはあまりないんです。

——興国同志会は一時分裂していた時期があったと思うんですが、何かご記憶ございませんか。

石井　興国同志会の歴史はあまり知りません。私は東大へ大正八年九月に入ってきて、八高の先輩の法科系のものが若干入っておりましたので、そういうような縁で、私はやや国粋的というか右のほうの傾向だったものですから、後で理屈をこねると共産党まがいのことをビシビシ言いますけれども、興国同志会へ入ったんです。その当時は鹿子木さんがドイツへ行っており、思想的には鹿子木さんがぐんと引っ張っておりまして、大物としてのリーダーは上杉慎吉先生です。そしてそれは私が入学早々から憲法の講義をお聞きした先生でしたしするから、興国同志会へくっついたんですけれども、新人会とけんかをやるつもりもなかったんですが、いちばん問題は経済学部に森戸事件というのがあったんです。あの森戸事件で興国同志会が、新人会で動いたやつへかみつくというか、攻撃する態度になったんです。私はそいつへ加わっておったんですが、若僧ですし大した熱意も持っておりませんでしたが、その当時に初めて色刷りの『我等』という機関誌を作ったんですが、それの創刊号の巻頭辞で鹿子木さんがドイツから帰ってきて書いたんです。どんな内容だったか全然頭にありませんが、それが筆禍事件に引っかかったんです。右の雑誌でどうしてあのとき引っかかったのか不思議ですが、それで「発禁」を食ったんです。私は入って、会費らしいものは納めたかどうか知りません。われわれの目の前に出てきているいちばんのリーダーは平泉さんで、その下に私ども法学部の先輩などもおりましたが、私は間もなく逃げ出したんです。

憲法の講義は上杉先生に聞いておりますから、私の先生には違いないんですが、先生は信念居士で私どもに天皇とか、日本の国体という言葉をよく使われましたが、理論的に国柄ということを説いていかれる行き方ではなかったんです。それで興国同志会の中において「このことは反対する」、「こいつはいけないんだ」、「このことはいいんだ」とかいうそのスタンダードは、上杉先生が云われるからだという風であって、それには、私は反発したんです。

おれはいやだ、上杉先生のおっしゃることはそれは大部分はそうかもしれないけれどもおれに納得がいくことでなければおれはいやだという気持が起こりまして、そこでしばらく疑問を持ちつつ、しかたなしに出ておりましたが、これはとてもだめだと思ったから、周囲の先輩に、まことに生意気なことをいいますけれども、上杉先生のいわれることが是非の判断の標準になるということについては、ちょっと私は受け取れないから、済まんけれどもこれからもうしばらく縁を断たせていただくということを言って、退いてしまったんです。

それだけのことですから、それ以上のことは知らないんです。『我等』という雑誌がどこかにあるとははっきりしますが、私も一冊もらい

ましたが不幸にしてどこかへやってしまいました。表紙に赤い色が使ってありました。あれは結局一号出たきりでおしまいになったんです。あれは夢のようにしか私の頭には残っていないんです。

思想指導のことなど

石井　次に思想の取締まりのことですが、後には「思想善導」ともいいました。そんなことなどできっこないんだ。だれがやるんだということを当時もよく云われたものです。私は自分にいわれて、うぬぼれて自分はやるつもりでここへ入ってきたんだからとの気持ちで忙しいときはメチャクチャに何日もやったものです。思想事件を起こした学生は学生課の応接室を使って一人に三時間も四時間も話し込んで、考えを聞いてやるし、今日は忙しいからやめておこうかとか、「おれの家へこい」とか言って、貧乏世帯ですから女房、女中の手料理で、また男の学生ですから僕と一緒に風呂に入りながらも話をしました。とにかくどうしても納得しないのもいる。これに対しては、「君と全然逆の立場で、君と同じ強さの反対意思を持っている人間がここにおるんだから、どうしても僕の意見が聞けなくて赤の運動をやりたかったら、僕を説きつけてからやるか、それもまどろこしかったら、僕を殺してからやれ」というと黙っております。そうなるとやりませんね。そういう点は可愛かったです。

終戦になった時うちのものまでが、「あなたは約二千人の赤い学生を調べ上げており、たくさんの赤い学生からうらまれているので、アメリカ軍にさされて戦犯扱いにされますぞ」といわれました。私は一人でも憎んでやったものは一人もいないんです。北京へ行っても二年数ヶ月間思想指導をやったのですが、幸いにしてだれにもうらまれてはいなかったんです。従ってさされたことも一度もなかったのです。

――きょうはおもしろいお話をありがとうございました。

（この記録は当日の録音をもとに百年史編集室が編集したものです。）